説教20210307 一コリ10：1-13　ルカによる福音書１３：１－９

　　 「肥やしと実り」 23　Ⅱ158　400

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

いちじくの木は、聖書の中で割を食っていて、主なる神から枯らされたり、呪われたりすることが多いのですが、それに比べてぶどうの木はどうでしょうか。聖書で語られるぶどうの木は、「まことのぶどうの木」であり、主イエスキリストのいます神の国のたとえでもあります。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。」と主イエスはヨハネ福音書で言っておられます。私たちはぶどうの木の枝という部分であり、そのようにして主イエスとつながっていれば、絶えず豊かに実を結び続けることが出来るという事です。実に、分かりやすくて、すぐにでも誰かに話して、イエス様のことを知らせたいと思わされるような美しい話であります。

それに引き換え、いちじくの木といいますと、今日の聖書箇所でも、主なる神はその木を切り倒そうとされるおつもりですし、マタイ福音書には、いちじくの木を呪って枯らしてしまうイエス様のお姿があります。

こんなに扱われ方が違う、いちじくの木とぶどうの木でありますが、旧約の時代には両者はそんなに差を付けられることなく、そして概して主なる神から試練にあわされる対象でありました。詩編は次のように歌います。「神はぶどうの木を雹ひょうで打ち／いちじく桑を霜で枯らし」ですとか「主はぶどうといちじくを打ち／国中の木を折られた。」というようにぶとうといちじくは並べて語られているのです。

私事で恐縮ですが、１０年程前千葉県の田舎に住んでいまして、周りに、ブドウといちじくの野生種に当たる、野ぶどうやいぬびわがあちこちに自生していました。野ぶどうはつるを這わせて野生に生き延び実を結びます。いぬびわは道端にその目立たない姿を群生させています。どちらも、ひょうでうたれようが、霜にやられようが、かれることはあるまいと思わされる強さを感じさせてくれます。野ぶどうの寿命は１００年以上だともいわれています。そしてその実の味はといいますと、野ぶどうは酸っぱく、いぬびわのほうは味気ないのです。このこともその通り旧約聖書にしるされた箇所があります。

何故か分かりませんが、ぶどうの木といちじくの木の原種の姿をお知らせしたいと思いましたので、頭の片隅に覚えておいていただければと思います。

さて、今日のルカ福音書の箇所でのいちじくの木についてですが、主イエスはこのたとえ話で、何をお示しになられたのか、そんなにすぐにわかるような話ではないようです。「まことのぶどうの木」のお話のように分かりやすい話ではありません。わかりにくい話です。そもそもイエス様は、分かる人にはわかり、分からない人にはますます分からないようにしますよ、といって、私たちにいろいろなたとえ話をなさいました。まるでなぞかけのようですが、私たちは、そのイエス様からのたとえ話に絶えず耳を傾け、その意味を考え続けてまいりたいと願います。

　今日読まれましたルカ福音書の箇所は一つながりでありまして、先ず初めにガリラヤ人の地方のことが語られます。それから、エルサレムという都市のことが語らます。それからたとえ話に入りまして、いちじくの木に喩えられたイスラエルの国のことが語られます。ガリラヤ、エルサレム、イスラエルと、だんだんとその語られる共同体の規模が大きくなっていくことがわかります。イエス様はこうして、この地上でのイスラエルという全体の共同体のことをいちじくの木に譬えて、何かを語ろうとされているのです。この地上でのイスラエルという国は、いちじくの木に譬えられます。

日本人は、今日のたとえに様にある国が、神によって切り倒されるなどと聞くと、ぎょっとして絶望感にとらわれる方も多いのではないでしょうか。しかし、ひろく世界史に学べば、どんな地域の国々も、一つの国が滅んでは、また新たに再生していくという事の繰り返しなのです。又、私たちクリスチャンには、新しいエルサレムという、これはまことに滅びない国が与えられておりますので、私たちはその神の国の民として、地上の国が亡びても、動じることはないのです。聖書では、このような地上の国々の「死と再生」について、「ひこばえ」という言葉を使って美しく語っています。ひこばえというのは木の根元からぴょんぴょんと伸びてくる若い木の事ですが、このようにして元の木はその寿命を全うしその役割を終え、次の世代の若木が新たに育っていくのです。ですからこの地上の国々も、そのようにして更新されていくものだという思いが聖書にはあるのです。

さて、６節を見ますと、ある人がブドウ園にいちじくの木を植えておき、というちょっと不思議な表現が目につきます。これは、或る人が所有するブドウ園に、いちじくの木を植えておき、というように所有するという語句を補ったほうがわかりやすいかと思います。ここではブドウもいちじくもその野生の姿を脱して、ある人の所有物として実を結ぶべく管理されているのです。そして実際にこのブドウ園において日々その管理を任されているのは「園丁」であります。「或る人」は園丁に言います。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』と。それに対し園丁は、『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』と答えるのです。ここで園丁が「ご主人様」と呼びかけているのは「キュリエ」すなわち「主よ」という呼びかけですので、この園丁が、ブドウ園の所有者を主なる神のように思っていると読むことが出来ます。つまり、この園丁は私たち人間であり、ブドウ園の所有者は主なる神なのです。

主なる神は、この実を付けないいちじくの木に目をとめ、実を付けない木なら切り倒せと人間に申し渡しました。神は本来、御自分が植えておかれたもの、そしてその植えたものを抜く時を自由になさることでしょう。主によって土地に植え付けられたものが又引き抜かれる、その姿は人間の手が介在しない野生の土地においては尚自然なことでありましょう。

しかし主なる神が管理するこのブドウ園においては、その管理を任された人間たちがいるのです。

ブドウ園を任された人間たち、それは私たち自身でもあるのですが、その私たちはどうすればよいのか。このことがこのたとえ話の考えさせるところでありましょう。

さて、今日の冒頭にいちじくの木が割を食っている、と申し上げましたが、それは、イスラエルの国が、主に聞き従わず、偽預言者に従って堕落し荒廃してしまった姿が、ことごとく悪くて食べられない実を結ぶようないちじくの木に例えられてきたからでした。

いちじくの木というのは、堕落し荒廃したイスラエルの国のたとえとして語られてきましたので、ここでも主なる神はいちじくの木に対して辛辣なのです。

私たちは神の国の民として安心を得ていながら、一方ではこの地上の一つの国に属しています。この別府不老町教会が建っている、この日本という国はどうでしょうか。私たちはこの日本で暮らし、様々なつらい目に遭い、この国の将来にも不安を抱かざるを得ないのではないでしょうか。私たちはこのような地上の日々の暮らしにおいても、希望をもってその歩みを進めていくにはどうすればよいのでしょうか。私たちはこのような不安の中にある時、ひたすら主なる神のお守りを祈り求めることでありましょう。そして現にそのようにして私たちは守られ、日々の生活を守っているのです。

しかし、今日は、少し見方を変えて、このイエス様の話されるいちじくの木のたとえ話に聞いてまいりたいと願います。主なる神は単刀直入に「切り倒せ」と申し渡されます。これを聞いてショックを受けられる方もおられるかもしれません。しかし、これは荒れ野における、主なる神の私たち人間に課せられる試練の一つでありましょう。荒れ野の中で、イスラエルの人々の大部分は御心に適わず滅ぼされてしまったと、コリント書一には記されています。どのような人が滅ぼされてしまったかといいますと、「民は座って飲み食いし、立って踊り狂った」というように、偶像を礼拝した人たちでした。主なる神を忘れ、このように傍若無人にふるまって滅ぼされた人々のことを、私たちは他人ごととしてとらえることはできません。人間の罪は深いとか浅いとかゆうことで逃れられるものではなく、全ての人は「悔い改めなければ、皆同じように滅びる」からです。

そのことはイスラエルの国を譬えたいちじくの木のことを思えばはっきりすることでしょう。たとえ、私だけは、そのいちじくの木の中にあっても、良い実を結ぶ部分で在りたいと願っても、主なる神の「切り倒せ」という試練の前には歯が立たないことでありましょう。

それならば、私たち人間はどうすればよいのでしょう。そのことが最後の園丁の言葉の中に込められています。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』

この園丁は、この通り来年も、そしてその次の年も、このいちじくの木の周りに、穴を掘ってひたすら肥やしをやり続けたことでしょう。そしてその園丁の行いが続く限り、この実がならないいちじくの木も切り倒されることなく、生かされ続けたことでしょう。

この園丁は、このように自らの言葉と行いによって、主なる神の「切り倒せ」という意向を変えることが出来たのです。フォーサイスという神学者は、「神の意志を変えることはできないけれども、神の意向を変えることは出来るし、また時によってはそうして行く必要がある」と語りました。聖書の中で言えばそれはヤコブが、主なる神とモモの関節が外れるほどの格闘をして、主なる神の意向を変えたことにも見られます。

私たちは今日の聖句でとり上げましたコリント書一の聖書箇所をよく知って味わっていることと思いますが、私たちが主なる神から遭わせられるその試練が厳しければ厳しいほど、また同時に備えられます逃れの道というの、より明確に示されていくことでしょう。

私たちは、今日示された、この園丁と主なる神との格闘を通して、主イエス様のみ言葉の恵みをより深く味わい受け入れていきたいと祈り願います。

祈ります

天にいます

あなたは、私たちの地上の国を憂えて、時に、切り倒せ、という辛辣な言葉をもって警告を与えられます。どうか私たちがそのみ言葉を受け入れつつ、言葉と行いをもって、あなたにお応えしていくことが出来ますように。

東日本大震災から１０年が過ぎようとしています。多くの方々が波にのまれ亡くなられ、多くのご家族が残されました。どうか、そのすべての人たちをあなたのお守りのうちに置き、この時の経過のうちに再び生まれさせ、御心に適う豊かな日々をお与えくださいますように。

受難節も道半ばに差し掛かり、死と復活のイースターの日も見えてまいりました。私たちが全ての被造物の復活を祝い、まことの喜びに至ることが出来ますよう、今から私たちを悔い改めさせ、整え導いてください。殊にすべてのこの地にある教会が一つとなってあなたの御子の復活を祝い喜ぶことが出来ますように。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き